

遠隔授業を主とする大学体育実技の受講生による授業評価 —COVID-19流行下における2020年度 授業アンケートの自由記述の質的分類—

文谷知明*^{1,2} 門利知美*^{1,2}

要 約

本研究では「対面とオンデマンド型の遠隔を併用」した体育実技系必修科目の受講生を対象にアンケート調査を実施し、自由記述（意見、感想）を質的に分析することで、今後の授業の一助となる資料を得ることを目的とした。対象者は617名（男性152名、女性465名）であった。その結果、男性の授業評価は「肯定的」、「否定的」、「両方」の順に割合が高かった。一方、女性は「肯定的」、「両方」、「否定的」の順に高く、男女差がみられた。運動・スポーツの得意度、愛好度、好感度の得点は「両方」、「否定的」、「肯定的」の順に高く、運動が得意で好きな学生ほど、両方の意見を持っていることが示された。本授業はオンデマンド型を主とした形式であったが、双方向の工夫をしたことや多種多様に富んだ資料を配信したことが「肯定的」評価につながったと思われる。ポストコロナ期においても、対面授業にオンデマンド型の遠隔授業を加えることで授業内容の幅が広がり、ひいては授業満足度を高めることに寄与するものと考えられる。

1. 緒言

2019年末に確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界中の人々に予期せぬ自粛生活を強いることになり、およそ3年以上が経過した今日においても完全終息には至っていない。大学生対象の調査によると、身体活動量はコロナ蔓延前と比べて低下していること¹⁾、また歩数の減少幅が大きいほど抑うつ傾向にあることが報告されており²⁾、うつ症状の対策には相談できる人の存在と運動（体を動かすこと）が重要な因子であることが指摘されている³⁾。大学の一般（教養）体育は受講生の心身の健康に貢献できる科目の一つであるが、コロナ禍においては対面授業を主としながらも遠隔授業も考慮せざるを得なかった。

村山ら⁴⁾は2020年度後期（秋学期）と2021年度前期（春学期）に実施した大学一般（教養）体育の授業形態について調査し、全国の大学・短期大学131校からの回答を分析している。その結果、2020年

度後期は「対面とオンデマンド型の遠隔を併用」が40.5%で最も高く、次いで「対面のみ」38.9%、「オンデマンド型の遠隔のみ」26.7%、「対面とリアルタイム型の遠隔を併用」14.5%であり、2021年度前期については「対面のみ」が46.6%で最も高く、次いで「対面とオンデマンド型の遠隔を併用」38.9%、「オンデマンド型の遠隔のみ」20.6%、「対面とリアルタイム型の遠隔を併用」15.3%であったと述べており、多くの大学・短期大学で遠隔授業の活用が明らかとなった。

このような状況下において、鈴木ら⁵⁾は遠隔授業として利用可能な身体活動増進プログラム（健康関連体力としての持久的運動、レジスタンストレーニング、ストレッチングで構成されたプログラム）、いわゆる「岡大プログラム」を複数の大学・短期大学に提供し、19校1,333名の学生から高い満足度と総合評価を得たことを報告している。一方、西田ら⁶⁾は42大学の一般体育受講生を対象に、遠隔授業をオ

*1 川崎医療福祉大学 総合教育センター

*2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

（連絡先）文谷知明 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : bunya@mw.kawasaki-m.ac.jp

ンデマンド型(1,565名)とリアルタイム型・同時双方向型(1,122名)と比較し、オンデマンド型の学修成果(主観的恩恵, 身体活動)は対面授業(プレコロナ期)やリアルタイム型と比べて低く, それは運動に無関心な学生で顕著である可能性を指摘している。このように, ほとんどの大学が経験したことのない遠隔授業については一定の学修成果を得つつも, 検討すべき課題も多いことが窺え, アンケート結果(以下, 授業評価)をもとに必要に応じて授業改善を行うことが求められる。

ところで, 授業評価については授業者(教員)の視点⁷⁾と受講者(学生)の視点が存在する⁸⁾。また学生による授業評価についても, 数量的な分析^{5,8)}と質的な分析^{8,9)}がみられる。自由記述をもとに質的分析を行った報告は講義科目¹⁰⁾にはみられるものの, 遠隔の体育実技についての報告は見当たらない。そこで本研究では, 「対面とオンデマンド型の遠隔を併用」した体育実技系必修科目の受講生にアンケート調査を実施し, 自由記述を分析することで今後の授業の一助となる資料を得ることを目的とした。

2. 方法

2.1 当初の授業計画(シラバス)

岡山県内のK大学における1年次開講の体育実技系科目「健康体育基礎演習」は「スポーツ系」, 「フィットネス系」, 「レクリエーション系」の3つのカテゴリーに分け, それぞれを5回ずつ対面にて実施する内容である。スポーツ系とレクリエーション系は授業時間内に楽しく適度に運動量を確保することを目的としたプログラムであり, フィットネス系は体力

づくり運動で自宅等でも実践できるプログラムから成っている¹¹⁾。なお, 授業のねらいは大学の理念である「人間をつくる」「体をつくる」「医療福祉学をきわめる」¹²⁾に鑑み, 「運動・スポーツを通して, 他者に対する共感や思いやり, 協調性を学び, 今後の生活に活かす基礎を培う。自らの心身を適切に管理し, 生涯にわたり健康・体力づくりを実践していく力を養う。ひいては, 人々の健康増進に貢献する意気を習得する。」となっている。

2.2 授業計画を変更した経緯

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い, 当初計画した授業プログラムの実施が難しくなった。本授業は卒業必修科目であるため, 1年次生全員を次年度以降へ移行することは困難であることから, 同年度に開講することが求められた。そこで感染症予防の観点から授業計画を変更し, 対面授業と遠隔授業の両方で対応することになった。

2.3 変更後の授業内容

第1回と第2回は前半と後半の2グループに分けることで人数を制限する。ソーシャルディスタンスを保つために椅子に座るまたはその場で立位での「からだほぐし」など感染症対策に留意し対面授業を行った。1週間ごと運動記録ができる記録表15週分とストレッチングとレジスタンス運動の印刷資料を配布した。記録表は第15回の授業終了後に回収した。詳細は既報^{12,13)}のとおりである。

第3回からは毎週月曜日にフィットネス関連のVOD(総数: 静止画14点, 動画17本)を順次配信した(表1)。内容は多岐にわたる運動種目や強度で, 自宅等で一人でも楽しく行えるよう工夫した。学生

表1 配信リスト(静止画・動画)

運動分類	配信内容
ストレッチング	ストレッチング(床編・椅子編・立位編), 腰痛改善のためのストレッチング 部位別の静的ストレッチング, 簡単ヨーガ
レジスタンス運動	レジスタンス運動(基礎編), 筋力を高めるためのトレーニング 体幹トレーニング(バランス運動, 腕立て伏せ, プランク系・バードドッグ) 脚を鍛えよう(両脚スクワット, 片脚スクワット)
有酸素性運動	ラジオ体操第1(佐賀弁)・第2(津軽弁), ラジオ体操第3, コスモス体操 ウォーキング・スロージョギング, エア自転車こぎ チェアエクササイズ, 簡単なエアロビックダンス, 柔道ピクス
その他の運動	目・肩・首の疲れが軽くなる3分間体操, 腹式呼吸, 姿勢をよくするための運動(ドローイン) まさつ体操, くの字運動・Sの字運動・スワイショウ, 八段錦(1, 2, 3, 6段錦)

各学期の配信総数: 静止画 14点, 動画 18本(最長 8分45秒, 最短 2分29秒, 平均 4分49秒)

には配信した静止画や動画を視聴し感想等を送信すること、自宅等で運動を実践した内容を記録することを課した。記録表はストレッチング、レジスタンス運動、有酸素性運動、その他の運動に分けて記入する形式とし、これらの運動をバランス良く実施するよう促した。運動時間の目安は週に合計70分（1日10分相当）以上とした。また、学生からの質問に答える「QandA」や運動時の工夫、他の学生に勧めたいこと等を提示し、教員—学生間、学生同士の情報共有に努めた。アンケートは全授業終了後に対面にて実施した^{13,14)}。

2.4 調査対象者

K大学において、2020年度春学期および秋学期に「健康体育基礎演習」を受講した学生のうち、個々の質問に記入漏れがなく、アンケートの自由記述がある617名（男性152名、女性465名）を対象とした。記述ありの割合は男性58.9%、女性74.5%、平均70.0%であった。

2.5 自由記述の分析

自由記述の内容を質的分析方法^{15,16)}を参考に、文中の類似言葉を整理してキーワード化した。次にこれらを「肯定的（満足・充実）」（以下「肯定的」と記す）、「否定的（不満・残念）」（以下「否定的」と

記す）、「否定的だが肯定的でもある、または肯定的だが否定的でもある」（以下「両方」と記す）、「その他」の4つに分類した。具体的な作業手順は以下のとおりである。① Excel ファイルに記述文を入力し印刷する、② ポイントとなる文章にラインマーカーを引く、③ Excel の同文章をハイライト表示する、④ 書面と電子データの両方を熟視しキーワードを導く、⑤ 記述文を分類する。作業は2名で担当した。表2に「その他」を除く3つの分類に該当する言葉を示した。

2.6 運動・スポーツの得意度、愛好度、好感度

自由記述との関係性を調査するために、3項目について4件法で質問した。得意度は「得意」、「やや得意」、「やや苦手」、「苦手」で回答を求めた。愛好度と好感度（高等学校までの「体育」の印象）は「好き」、「やや好き」、「やや嫌い」、「嫌い」で回答を求め、それぞれ順に4点～1点を割り当てた。

2.7 統計解析

4つの分類と性差の関係性は χ^2 検定を用いた。「その他」を除く3つの分類と運動・スポーツに対する得意度、愛好度、好感度との関係については点数化した後に Kruskal-Wallis 検定を行い、有意な主効果が認められた場合には Bonferroni 補正によ

表2 分類に用いた自由記述の言葉（キーワード）

肯定的 (満足・充実)	否定的 (不満・残念)	否定的だが肯定的でもある または 肯定的だが否定的でもある
楽しかった おもしろかった 気持ちよかった 役立った 運動のきっかけ ありがたかった ためになった 運動が習慣化した 新しいことを知ることができた 続けていきたい 達成感 運動不足改善 ストレス解消、息抜き、癒し 良い時間を過ごせた 自分のペースで運動できた 取り組みやすかった 参考になった 管理できた 成長できた 身近に運動につながる行為があった	残念だった 悔しかった みんなで一緒にしたかった 普通に体を動かしたかった みんなでスポーツしたい みんなで球技したい 対面がいい 体育がしたかった 物足りない 交流したかった	否定的 残念だった 悲しかった 対面でしたかった 不満 寂しかった 肯定的 楽しかった おもしろかった ためになった 役立った いい機会になった

る多重比較を行った。統計処理には SPSS 23.0 for Windows (日本 IBM) を使用した。有意水準はいずれも5%未満とした。

3. 結果

3.1 分類別の人数

表3に分類別の人数 (%) を示す。男女とも「肯定的」が最も高く、その割合は女性 (54.6%) が男性 (41.4%) より約13%高かった。「否定的」は男性19.7%, 女性9.3%で、男性が女性に比し約10%高かった。「否定的・肯定的の両方」の意見は男女とも15%程度みられた。男女の回答比率には有意差が認められた ($p < 0.01$)。

3.2 3つの分類と運動・スポーツの得意度, 愛好度, 好感度の関係

表4に「その他」を除く3分類の各カテゴリー人数 (%) および平均値±標準偏差を男女合計 (480名) で示す。「肯定的」は317名 (66.0%), 「否定的」は73名 (15.2%), 「両方」は90名 (18.8%) であった。

得意度は「肯定的」 2.52 ± 0.96 , 「否定的」 2.75 ± 1.01 , 「両方」 3.00 ± 0.82 であり, 「両方」が「肯定的」よりも高値を示した ($p < 0.001$)。愛好度は「肯定的」 3.06 ± 0.92 , 「否定的」 3.42 ± 0.86 , 「両方」 3.63 ± 0.59 であり, 「否定的」が「肯定的」よりも, また「両方」が「肯定的」よりも高値を示した (いずれも $p < 0.001$)。好感度は「肯定的」 2.95 ± 1.05 , 「否定的」 3.47 ± 0.88 , 「両方」 3.54 ± 0.77 であり, 「否定的」が「肯

表3 分類別の人数

分類	総数 (617名)	男性 (152名)	女性 (465名)	男女比較
肯定的 (満足・充実)	317 (51.4)	63 (41.4)	254 (54.6)	
否定的 (不満・残念)	73 (11.8)	30 (19.7)	43 (9.3)	
否定的だが肯定的でもある または 肯定的だが否定的でもある	90 (14.6)	23 (15.2)	67 (14.4)	$\chi^2(3) = 14.8$ $p < 0.01$
その他	137 (22.2)	36 (23.7)	101 (21.7)	

人数 (%), χ^2 検定

表4 3つの分類と運動・スポーツの得意度, 愛好度, 好感度の関係

項目	選択肢\分類	肯定的 (317名)	否定的 (73名)	両方 (90名)	検定	多重比較
得意度	4. 得意	55 (17.4)	20 (27.4)	28 (31.1)		
	3. やや得意	108 (34.0)	25 (34.2)	36 (40.0)		
	2. やや苦手	102 (32.2)	18 (24.7)	24 (26.7)	H値=17.6	肯定的<両方
	1. 苦手	52 (16.4)	10 (13.7)	2 (2.2)	$p < 0.001$	
	平均値±標準偏差	2.52 ± 0.96	2.75 ± 1.01	3.00 ± 0.82		
愛好度	4. 好き	124 (39.1)	45 (61.6)	62 (68.8)		
	3. やや好き	107 (33.8)	18 (24.7)	23 (25.6)		
	2. やや嫌い	67 (21.1)	6 (8.2)	5 (5.6)	H値=35.8	肯定的<否定的
	1. 嫌い	19 (6.0)	4 (5.5)	0 (0)	$p < 0.001$	肯定的<両方
	平均値±標準偏差	3.06 ± 0.92	3.42 ± 0.86	3.63 ± 0.59		
好感度	4. 好き	124 (39.1)	49 (67.1)	62 (68.9)		
	3. やや好き	93 (29.3)	13 (17.8)	17 (18.9)		
	2. やや嫌い	59 (18.6)	7 (9.6)	9 (10.0)	H値=37.1	肯定的<否定的
	1. 嫌い	41 (13.0)	4 (5.5)	2 (2.2)	$p < 0.001$	肯定的<両方
	平均値±標準偏差	2.95 ± 1.05	3.47 ± 0.88	3.54 ± 0.77		

人数 (%), Kruskal-Wallis検定, Bonferroni補正

定的」よりも、また「両方」が「肯定的」よりも高値を示した (いずれも $p < 0.001$)。

3.3 自由記述の内容

表5に記述内容を抜粋して示す。肯定的意見には「小学校や中学校、高校では習わなかった体操やストレッチを知ることができたので良かった。どの運動も楽しかった。」、「家で体育の授業をするのは初めてだった。家だからこそ母と一緒にすることができた。」などがあつた。否定的意見には「対面で体を動かしたい。あまり体育をしている感じがなかった。」、「対面授業の方が圧倒的に楽しいと思うし、

ためになる。」などがあつた。両方の意見としては「対面でなかったので『する意味ないだろう』と正直思ってしまったが、役に立つ授業がほとんどだったので学べて良かった。」などがあつた。また、その他の意見には「実際にみんなで運動できなかったのが残念な反面、できない部分が露呈しなくて良かったなと思った。」などがあつた。

4. 考察

4.1 性差の観点から

男女とも「肯定的」の割合が最も高かつたが、そ

表5 自由記述の内容 (抜粋)

分類	意見
肯定的	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校や中学校、高校では習わなかった体操やストレッチを知ることができたので良かった。どの運動も楽しかった。(女性) ・家で体育の授業をするのは初めてだった。家だからこそ母と一緒にすることができた。(女性) ・私は元々運動が苦手だった。週に70分は初めはキツかつたし、やろうと思わなければできなかった。でも毎週繰り返していくうちに習慣になっていき、運動が楽しいと思えるようになった。そう思える自分が嬉しかつた。この講義が毎週楽しみだつたし、楽しかつた。(女性) ・今のコロナ禍だからこそ、やって損のない授業だつたなと感じた。(男性) ・今まで全く運動をしてこなかつたが、運動習慣を身につけることができた。特に変化があつたと思うのがメンタルヘルスです。運動習慣をつける前と比べて普段の気分が良好になり、落ち込むことが少なくなつたように感じる。運動は身体のみならずメンタルヘルスにも効果があり、心と身体は深いつながりがあるということを、身をもって経験した。(女性)
否定的	<ul style="list-style-type: none"> ・対面で体を動かしたい。あまり体育をしている感じがなかつた。(男性) ・対面授業の方が圧倒的に楽しいと思うし、ためになる。(男性) ・VODなのはしょうがないと思うけど、やっぱりみんなとわちゃわちゃスポーツしたかつた。(女性) ・施設費も学校側に払っているし、授業料もタダではないので、ちゃんと大きな体育館でバドミントンとか球技をして、学部の人と仲良くなりたかつたなと思った。一人だとモチベーションが持たなくなるなとも思った。(女性) ・対面だつたら週1の授業で良いのに、遠隔なら毎日運動しなければならないのは意味が分からなかつた。(女性)
両方	<ul style="list-style-type: none"> ・対面でなかつたので「する意味ないだろう」と正直思ってしまったが、役に立つ授業がほとんどだつたので学べて良かった。(女性) ・この授業のおかげで運動する習慣が身についた。また運動を家族と一緒にやる機会が増えて、コミュニケーションをとることも多くなつたので感謝している。友達と一緒に運動しながら授業を行えなかつたことは少しさみしかつた。でも、いろんな運動方法が知れてとても楽しかつた。(女性) ・やっぱり、みんなと一緒に対面で運動をしたかつた。コロナウイルスが収まってできるようになつたらしっかり楽しみたい。でも自分一人でちょっとした運動をすることをルーティンにできたことがうれしかつた。これからも続けていこうと思う。(女性)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にみんなで運動できなかったのが残念な反面、自分の運動が苦手できない部分が露呈しなくて良かったなと思った。(女性) ・体育は嫌いなままであつたが、好きなように運動するのは嫌いではないなと思うようになった。たぶん、高校までのやりたくない苦手なことを強制されるのが嫌なだけだつたのかも知れない。運動に対する気持ちが変わつたのは、ちょっとおもしろいと思つた。体育の教育もあながち不要なものではないのだなと感じた。(女性)

れは女性で顕著であった。一方、「否定的」は男性の割合が高かった。本授業で配信した資料(静止画, 動画)は自宅等で一人でも行えるフィットネス関連のものである。女性は男性よりもスポーツ系よりもフィットネス系の運動を好む傾向があり, 男性はスポーツ系を好む傾向があるとの報告¹¹⁾と一致する。

4.2 3つの分類と運動・スポーツの得意度, 愛好度, 好感度の観点から

「両方」の回答は18.8%, 「否定的」は15.2%と低い割合であった。これを前提として, 「両方」, 「否定的」の得意度, 愛好度, 好感度に違いがみられるか検討した。その結果, 平均得点は有意な差ではないものの「両方」が「否定」よりも高かった。運動が得意で好きな学生ほど対面で行うスポーツ系, レクリエーション系の運動を好む¹¹⁾ことが報告されている。これらの学生は遠隔授業に対して全て「否定的」と予想していたため, 「両方」の得点が高かったことは意外であった。本授業では学生の体力水準が異なること, 運動の嗜好が異なることに配慮し, 様々な種目を配信した。運動が得意で好きな学生は様々な情報に関心があり, 対面授業でなかったことは不本意ながらも, 新たな情報を得ることを容認した結果なのかもしれない。内容が表1のごとく多種多様に富んでいたことも「両方」の得点が高かったことと関係していると推測する。

「肯定的」な得意度, 愛好度, 好感度の得点は「否定的」や「両方」よりも低かった。その理由には, 配信内容が女性の関心が高いフィットネス関連であったこと, かつ女性の調査対象者が多いために「肯定的」に女性が多く存在したことが挙げられる。

4.3 「肯定的」意見の観点から

「肯定的」意見には「小学校や中学校, 高校では習わなかった体操やストレッチを知ることができた」, 「毎週繰り返していくうちに習慣になっていった」, 「運動は身体のみならずメンタルヘルスにも効果あり」などがあつた。本授業では「飽きさせないで「楽しく」運動してもらうことをモットーに配信した。また「分りやすさ」にも力点を置き, 動画にはできる限り解説資料(静止画)を加えた。鈴木ら⁵⁾は身体活動増進プログラム(持久的運動, レジスタンストレーニング, ストレッチング)を継続することで体力の向上を認めており, 佐藤¹⁷⁾は運動の習慣化はメンタルヘルスに良い影響を及ぼすことを報告している。運動の継続・習慣化が心身にとって重要であることを, 外出が制限されるコロナ禍において感化できた学生がいることは意義深いことである。

「家だからこそ母と一緒にすることができた。」の

ように, 家族のメンバーと一緒に運動したとの意見(感想)は数多くみられた。現在, 医療福祉を考慮した体育授業を模索しているが, 家族と一緒に運動することはこの医療福祉に通じるものがあると考えられる。アクティブガイド¹⁸⁾によると, 運動習慣がある人には「つながる」, いわゆる他者(家族や仲間)と一緒に運動することを奨励している。5期に分類される行動変容ステージ(無関心期, 関心期, 準備期, 実行期, 維持期)¹⁹⁾のうち, 身体活動状況が実行期(行動を変えて6ヵ月未満)や維持期(行動を変えて6ヵ月以上)にある学生が増えること, そして一人でも多くの人と運動を共有する意識が高まることを期待したい。

4.4 「否定的」意見の観点から

「否定的」意見には「対面で体を動かしたい」, 「みんなとスポーツをしたい」, 「体育をしている感じがしない」, 「対面授業の方が楽しい」などがあり, 小学校・中学校・高等学校で当然のごとく行ってきた対面授業を望んでいることが明らかとなった。佐橋ら⁸⁾は「概して, 学生にとっての体育授業は, スポーツや運動を気軽に, 友人と一緒にワイワイと楽しむ時間, 気分転換や発散ができる息抜きの時間, といったようにステレオタイプ的に捉えられている」とし, 「画面越しにではなく, 人と一緒にスポーツや運動をキャンパスで楽しみたい」という強い期待を寄せていること, 「体育は対面で行ってこそ体育だ」という考えを多くの学生が共有していることを報告している。この対面授業への思いは本調査の「否定的」意見と概ね類似している。大学教育, とりわけ体育には「コミュニケーション」や「協調性」, 「共同的・支援的な関わり」, 「スポーツマンシップ」, 「社会人基礎力・自己省察力」が期待されている⁴⁾が, 教員対象の調査によると, 遠隔授業では「協同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上」の得点が極めて低い結果になっている⁷⁾。これは本来, 対面で教えるべきことが教えられず, 自己矛盾を感じながら授業を担当していたことになり, 学生の立場に置き換えると, 対面で学ぶべきことが学べなかったことになる。この「協同プレーとコミュニケーション」を兼ね備えている対面授業と欠乏している遠隔授業を比較し, 「協同プレーとコミュニケーション」することを楽しいと感じている学生は「否定的」と回答したと考えられる。

「施設費を大学に支払っているので体育館を使用したい」旨の意見もみられた。体育館で身体を動かしたいと切望する学生の意見には共感できる。これについては教員として真摯に受け止め, 肝に銘じておく必要がある。対面だったら週1の授業で良い

のに、遠隔なら毎日運動しなければならないのは意味が分からなかった。」という疑念が残る意見もみられた。本授業では週に合計70分（1日10分相当）以上の運動時間を目標にしており、必ずしも毎日の運動を強要するものではなかった。運動の習慣化が健康的な生活に重要であることは周知の事実であるが、K大学の理念の一つである「体をつくる」¹²⁾ためには、週1回の対面授業のみで達成することは極めて難しく、毎日とは言わないまでも週に数日の運動実践は必要であろう。日常生活の中で、身体を動かすことの大切さを十分に周知できていなかったことは残念なことである。このような意見を持っている学生に対しては、自宅等で実践できるフィットネス関連資料を充実させ、興味を引きつけ運動したいと思ってもらえるような資料を提示することが運動習慣化の後押しに寄与するものと期待される。

4.5 「その他」の意見に着目して

印象に残った意見に「実際にみんなで運動できなかったのが残念な反面、自分の運動が苦手できない部分が露呈しなくて良かったなと思った。」があった。また「体育は嫌いなままであったが、好きなように運動するのは嫌いではないと思うようになった。たぶん、高校までのやりたくない苦手なことを強制されるのが嫌なだけだったのかもしれない。運動に対する気持ちが変わったのは、ちょっとおもしろいと思った。体育の教育もあながち不要なものではないのだなと感じた。」があった。

波多野ら²⁰⁾の大学1年生調査によると、運動嫌いな人は消極的な性格で他人の目を気にしやすく、失敗することを恥ずかしいと感じる傾向にあり、運動に対する「食わず嫌い」の態度が体育授業で増幅していったと述べている。春日ら²¹⁾は女子大学生に対し小学校、中学校の振り返りから運動・スポーツや体育の嫌悪ポイントを調査している。その結果、「走ることがイヤだ」、「優劣がつくからイヤだ」、「運動能力が知れ渡るからイヤだ」、「グループ化があるからイヤだ」などが上位に位置していた。運動嫌いな学生が遠隔授業を受けることで、「運動に対する気持ちが変わった」、「体育が不要なものではない」と肯定的に変化したことは授業担当者として感慨深い。対面授業に戻った際には、運動が嫌い、苦手な特に女子学生が少なからずいることを意識し、グループ（チーム）編成を工夫する、ルールや用具（ボール等）の変更など、授業展開に気を配ることが重要と思われる。また遠隔授業との併用も検討に値するであろう。

4.6 本研究の限界

本研究の自由記述ありの割合は男性58.9%、女性

74.5%、平均70.0%であり、男性の割合が著しく低かった。記述が無かった30%の学生はどのように判断したのか知ることができないため、本結果を授業の全体像として述べるにはやや難がある。これは本研究の限界と言える。

4.7 今後の課題と方向性

遠隔授業は不測の事態（地震や台風など）に対応できる授業形式であるため、コロナ渦においても有効な手段として活用されてきた。相場²²⁾は、遠隔授業の特長をまとめた上で、「理想の授業とは対面授業の中にオンライン授業（遠隔授業）を補足的に利用した授業」であることを強調している。小倉ら²³⁾は大学体育における対面実技授業は、スポーツを介して他者と直接的に関わりコミュニケーション能力や協調性を養う機会として重要であるとしながらも、補助的に動画や講義資料を配信し、予習・復習に活用することは授業全体の教育効果を高めることにつながると述べている。西本²⁴⁾は授業満足度とフィードバック（提出物への対応、解説等）の関係について分析し、遠隔授業であれ対面授業であれ、教員からのフィードバックがあるほど授業満足度が高いことを報告している。本授業では学生からの質問に答える「QandA」や運動時の工夫、他の学生に勧めたいこと等を提示し、教員—学生間、学生同士の情報共有に努めた。リアルタイムではないオンデマンド型であったとしても双方向の工夫をすれば、学生満足度はそれほど下がることはないのかもしれない。

文部科学省²⁵⁾は大学・高等専門学校においてデジタル技術を積極的に採用することを提示し、DX（デジタル・トランスフォーメーション）を迅速かつ強力に推進することを求めている。この状況について、西田ら⁶⁾は体育授業も例外ではなく、健康やスポーツに関する講義科目では既にDXを導入している大学が存在しており、ポストコロナ期には非対面式のオンデマンド型体育実技授業が普及する可能性が考えられると述べている。ところで、公認欠席の場合は原則として補講を実施することになるが、代替措置としてレポートやeラーニング等により授業に相当する学習を課す大学もみられている。集団でスポーツを行うことが多い体育実技の補講については、対面実技型よりもオンデマンド型の方が速やかに且つ多人数に対応できるため、実用的と言える。本授業で配信した自宅等で一人でも実践可能なフィットネス関連の資料は、ポストコロナ期の公認欠席の対応にも十分に活用できると考える。

本授業では配信した静止画や動画を視聴し感想等を送信することを課した。原則「見て行った感想」

を求めたが、「見た感想」も認めた。これは身体等の障害による配慮を必要とする学生が少なからず存在するため、強度が高い運動や特定の部位に負荷が掛かる運動は無理して行わなくて良いというメッセージである。掲載資料には移動を伴う運動があり、「机に足をぶつけた」など怪我につながり兼ねない感想がみられた。オンデマンド型では教員は速やかな学生対応ができないため、怪我の防止等、安全面への配慮が課題として挙げられる。

ほとんどの教員、学生が初めて遠隔授業を経験し、そのアンケート自由記述を分析することで、対面授業では知り得なかったかもしれない学生の思い「生の声」を感じ取ることができた。「対面で授業を受けたかった」という意見は当然ながら理解できる。一方、遠隔授業でも運動の楽しさや有益さを感じ、肯定的に捉えた学生が多くいたことは予想外であり、担当教員として冥利に尽きる。一方的に配信するだけでなく、オンデマンド型ながらも双方向の工夫をしたことが「肯定的」の多さに影響した可能性が考えられる。インパクトのある様々な意見には必修としての「体育」のあり方を考えさせられた。対面授業に戻っても授業満足度を高め、社会人になってからも活用できる運動の情報提供が重要であると考える。

5. 結語

本研究では、「対面とオンデマンド型の遠隔を併

用」した体育実技系必修科目の受講生にアンケート調査を実施し、自由記述（意見、感想）を質的に分析することで、今後の授業の一助となる資料を得ることを目的とした。キーワードをもとに「肯定的」、「否定的」、「両方」、「その他」に4分類し、分類別の人数、分類と運動・スポーツの得意度、愛好度、好感度の関係を調べた。また特徴的な意見を抜き出した。有効回答は617名（男性152名、女性465名）であった。「その他」を除く結果の概要は以下のとおりである。

- 1) 男性の割合は「肯定的」、「否定的」、「両方」の順に高かった。女性は「肯定的」、「両方」、「否定的」の順に高く、男女差がみられた。
- 2) 総数で見ると、得意度、愛好度、好感度の得点は「両方」、「否定的」、「肯定的」の順に高く、運動が得意で好きな学生ほど、両方の意見を持っていることが示された。

自由記述には様々な肯定的、否定的、両方の意見がみられた。本授業では学生と意思疎通が難しいオンデマンド型を主とした形式を用いたが、リアルタイムではないながらも双方向の工夫をしたこと、配信した資料が多種多様に富んでいたことが、多くの「肯定的」な評価につながったと思われる。ポストコロナ期においても、対面授業にオンデマンド型の遠隔授業を加えることで授業内容の幅が広がり、ひいては授業満足度を高めることに寄与するものと考えられる。

倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたり、研究の目的、個人情報の保護、記載の任意性、成績には影響しないこと等を説明し、同意の上、協力を得た。なお、本調査は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て行った（承認番号20-050, 20-083）。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、動画撮影やアンケート実施にご協力いただいた健康体育学科の先生方に、またアンケートの回答にご協力いただいた受講生の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) Gallo LA, Gallo TF, Young SL, Moritz KM and Akison LK : The impact of isolation measures due to COVID-19 on energy intake and physical activity levels in Australian university students. *Nutrients*, 12(6), 1865-1878, 2020.
- 2) Giuntella O, Hyde K, Saccardo S and Sadoff S : Lifestyle and mental health disruptions during COVID-19. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 118(9), e2016632118, 2021.
- 3) ReseMom : 秋田大「コロナが学生の心身に与えた影響」1割以上うつ症状. <https://resemom.jp/article/2020/09/10/58061.html>, 2020. (2020.9.12確認)
- 4) 村山光義, 寺岡英晋, 永田直也, 東原綾子, 福士徳文, 稲見崇孝, 奥山静代, 清水花菜, 佐々木玲子 : 大学体育実技における成績評価に関する調査研究—新型コロナウイルス感染症拡大下における遠隔授業への対応とともに—. *大学体育スポーツ学研究*, 20, 99-109, 2023.
- 5) 鈴木久雄, 小林雄志, 太田暁美, 高丸功, 倉崎信子, 枝松千尋, 菅正樹, 住本純, 設楽佳世, ...伊藤武彦 : コロナ禍における「岡大プログラム」の有効性. *大学体育スポーツ学研究*, 18, 49-55, 2021.

- 6) 西田順一, 木内敦詞, 中山正剛, 難波秀行, 園部豊, 西脇雅人, 平工志穂, 中田征克, 西垣景太, ...田原亮二: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行下における「オンデマンド型」大学体育実技授業の学修成果に影響を及ぼす要因の検討—運動行動変容ステージに注目して—. 大学体育スポーツ学研究, 19, 1-14, 2022.
- 7) 難波秀行, 佐藤和, 園部豊, 西田順一, 木内敦詞, 小林雄志, 田原亮二, 中田征克, 中山正剛, ...平工志穂: 授業者からみたコロナ禍に行われた遠隔による大学体育実技の教育効果の検証. 大学体育スポーツ学研究, 18, 21-34, 2020.
- 8) 佐橋由美, 小西智咲子, 倉益弥生, 田邊智, 田中励子, 坪内伸司: R2年度学士課程主題別科目「運動と健康」における授業方法の変更が学生の目標到達度評価および授業評価に及ぼした影響. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 12, 97-104, 2022.
- 9) 樋口広思, 越中康治, 久保順也, 平真木夫, 田端健人, 梨本雄太郎, 本図愛実: コロナ禍における大学の遠隔授業—学生アンケートの数量的・質的分析をもとに—. 宮城教育大学教職大学院紀要, 2, 53-72, 2020.
- 10) 橋本和幸: コロナ禍にオンライン授業と対面授業の両方を受講した学生による授業評価. 了徳寺大学研究紀要, 16, 137-150, 2022.
- 11) 門利知美, 文谷知明, 宮川健: 3領域の運動で構成された体育実技系必修科目についての一考察—運動・スポーツに対する意識と受講後の認識との関連性—. 川崎医療福祉学会誌, 31(2), 465-475, 2022.
- 12) 川崎医療福祉大学: 大学の理念「人間をつくる 体をつくる 医療福祉学をきわめる」. <https://w.kawasaki-m.ac.jp/info/about/>, 2020. (2020.10.1確認)
- 13) 門利知美, 文谷知明, 宮川健: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 対策のために遠隔授業を活用した体育実技系必修科目の模索—受講学生を対象にしたアンケート調査結果 (第1報)—. 川崎医療福祉学会誌, 30(2), 631-644, 2021.
- 14) 門利知美, 文谷知明, 宮川健: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 対策のために遠隔授業を活用した体育実技系必修科目の模索—受講学生を対象にしたアンケート調査結果 (第2報)—. 岡山体育学研究, 29, 1-16, 2022.
- 15) 川喜多二郎: 発想法—創造性開発のために—. 中央公論新社, 東京, 1967.
- 16) 北村勝朗: コロナ禍におけるオンライン授業を通して大学体育は何をなし得たのか?—説明的文章完成法を用いた大学生の大学体育観の質的分析—. 大学体育スポーツ学研究, 18, 35-48, 2020.
- 17) 佐藤秀明: 大学生における運動・スポーツの実施と主観的メンタルヘルスの関係について. 桜文論叢, 103, 137-155, 2021.
- 18) 厚生労働省: アクティブガイド—健康づくりのための身体活動指針—. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002xple-att/2r9852000002xpr1.pdf>, 2013. (2016.3.29確認)
- 19) 岡浩一朗: 中年者における運動行動の変容段階と運動セルフ・エフィカシーの関係. 日本公衆衛生雑誌, 50, 208-215, 2003.
- 20) 波多野義郎, 中村精男: 「運動ぎらい」の生成機序に関する事例研究. 体育学研究, 26, 177-187, 1981.
- 21) 春日晃章, 中野貴博, 小栗和雄: 発育発達期における女子の運動, スポーツ離れに関する基礎研究—女子が進んで取り組むためには何が必要なのか?—. 笹川スポーツ研究助成成果報告書, 223-229, 2017.
- 22) 相場博明: オンライン授業の類型化と教育効果の予察的考察—GIGA スクールがほぼ実現している私立小学校と私立大学での実践を通して—. 教育実践学研究, 24, 37-50, 2021.
- 23) 小倉圭, 道上静香, 榎本雅之: 日常生活のセルフモニタリングおよび運動課題を中心としたオンライン体育授業の実践とその効果の検討. 大学体育スポーツ学研究, 18, 97-111, 2022.
- 24) 西本裕輝: 令和2年度前学期共通教育等科目における「学生による授業評価」の分析結果. 琉球大学大学教育センター報, 23, 18-45, 2021.
- 25) 文部科学省: デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン, および大学教育のデジタルライゼーション・イニシアティブについて. https://www.nii.ac.jp/event/upload/20201023-06_Mext.pdf, 2021. (2023.8.21確認)

(2023年12月1日受理)

Class Evaluation by Students of University Physical Education Practical Subjects Mainly Using Remote Learning: Qualitative Classification of Free-Description Questionnaires Conducted in 2020 under the COVID-19 Epidemic

Tomoaki BUNYA and Tomomi MONRI

(Accepted Dec. 1, 2023)

Key words : remote learning, physical education practical subject, free-description questionnaires,
qualitative classification, COVID-19

Abstract

In this study, we conducted a questionnaire survey of the students who took physical education practice compulsory subjects that “combined face-to-face and on-demand remote”, learning methods and qualitatively analyzed free descriptions (opinions and impressions). The purpose was to obtain materials that would be helpful in future classes. 617 people (152 men and 465 women) were surveyed. As a result, the percentage of class evaluations for men was “positive”, “negative” and “both” in that order. On the other hand, women answered “positive”, “both” and “negative” in that order, showing a gender difference. The scores for proficiency, liking and likeability for exercise/sports were highest in the order of “both”, “negative” and “positive”, indicating that students who are good at and like sports are more likely to have both opinions. Although this class was mainly of the on-demand type, it is thought that the “positive” evaluation was due to the interactive approach and the distribution of a wide variety of materials. Even in the post-COVID-19 epidemic, we believe that adding on-demand remote learning to face-to-face learning will expand the range of class content and contribute to increasing class satisfaction.

Correspondence to : Tomoaki BUNYA

Comprehensive Education Center

Department of Health and Sports Science

Faculty of Health Science and Technology

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : bunya@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.2, 2024 305 – 314)